

# 「愛媛大学学生として期待される能力 ～愛大学生コンピテンシー～」を解説する（試論）

松 本 長 彦

愛媛大学 理事・副学長（教育担当）

## An Essay concerning 《Ehime University Competencies Standards for Students: EUCS-S》

Osahiko MATSUMOTO

(Executive Director & Vice President (for Education and Student Support), Ehime University)

〈目次〉

1. 「愛大学生コンピテンシー」の策定について
  2. 「愛大学生コンピテンシー」の構成要素について
    - I. 知識や技能を適切に運用する能力
    - II. 論理的に思考し判断する能力
    - III. 多様な人とコミュニケーションする能力
    - IV. 自立した個人として生きていく能力
    - V. 組織や社会の一員として生きていく能力
  3. おわりに
- 〈参考資料〉

愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～

5つの能力	12の具体的な力
I. 知識や技能を適切に運用する能力	1. 必要な情報を収集・整理できる 2. 個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる 3. 習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現（記述・口述）できる
II. 論理的に思考し判断する能力	4. 広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる （例：クリティカル・シンキング／創造的思考） 5. 科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる （例：意思決定・判断力／課題探求・発見・解決力）
III. 多様な人とコミュニケーションする能力	6. 様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる （例：ダイアログ／ディスカッション／プレゼンテーション） 7. 目的達成のために多様な人と協働できる （例：協調性／チームワーク／リーダーシップ）
IV. 自立した個人として生きていく能力	8. 自らの個性や適性を活かして行動できる （例：自己理解／自己決断／リフレクション） 9. 社会的関係の中で自分の行動を調整できる （例：順応性／セルフマネジメント／規範遵守）
V. 組織や社会の一員として生きていく能力	10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる （例：「お接待」の心／ホスピタリティ） 11. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる （例：責任感／連帯感／帰属意識／愛校心） 12. 地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる （例：社会貢献／グローバルマインド）

## 1. 「愛大学生コンピテンシー」の策定について

愛媛大学は、2012（平成24）年7月の教育研究評議会において、「愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～」（Ehime University Competencies Standards for Students：EUCS-S、以下「愛大学生コンピテンシー」という。）を定めました。

一般的に「コンピテンシー」（competency）とは、「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力」（OECD、大学評価・学位授与機構）と定義されていますが、愛媛大学では、「愛大学生コンピテンシー」を「学生が卒業時に身に付けていることが期待される能力」と定義しています。

「愛媛大学憲章」が、大学全体の理念と目的・目標を表しているのに対して、「愛大学生コンピテンシー」は、「大学憲章」を踏まえながら、愛媛大学生が大学生として目指すべき方向目標（目指すべき方向）を示したものです。方向目標ですから、100パーセント達成することは必ずしも求められません。これが、卒業時に100パーセント達成していることを求められる到達目標であるディプロマ・ポリシー（diploma policy：DP＝学位授与方針）と異なるところです。

このDPと「愛大学生コンピテンシー」の違いは、DPが主に正課教育の成果として達成されるものとして設定されているのに対して、「愛大学生コンピテンシー」は、正課教育だけでなく、準正課教育<sup>1)</sup>及び正課外活動も含めた大学生活全体の活動を包括して設定されていることによります。学生の活動は、卒業（学士号を取得）するために必要な正課の授業や研究活動だけで構成されているわけではありません。大学において学生一人ひとりが人間として成長する機会、正課外のサークル活動や、準正課のボランティア活動、留学、下級生への学修支援等々、正課以外に

### 1) 準正課教育：

愛媛大学では、「卒業要件には含まれない、あるいは単位付与を行わないが、愛媛大学の教育戦略と教育的意図に基づいて教職員が関与・支援する教育活動や学生支援活動」を「準正課教育」（co-curricula）と定義しています。準正課教育の特徴としては、（1）正課教育に比べて、学生の主体性のウェイトがより大きい、（2）教職員が活動内容に責任を持って関与し、適切な指導を行っている、ということが挙げられます。

しかし、正課教育と準正課教育の境界は、固定的なものではなく、大学全体や各学部等の教育戦略に基づいて、準正課教育から正課教育に組み込まれるものもあります。また、準正課教育と正課外活動も、その境界は必ずしも明確ではありません。一応の境界線として、大学が教育戦略と教育的意図に基づいて公式に設けているものが準正課教育、これに対して、学生の純粋に自発的な活動によって成立し、それを大学が公認しているものが正課外活動ということになります。

もたくさんあります。

愛媛大学は、このような学生の活動の場を大学として責任を持って確保し、大学生生活全体を通して学生一人ひとりが、知的に成長することはもとより、人間としてトータルに成長することを支援するという認識の下に、「愛大学生コンピテンシー」を策定しました。従って、この「愛大学生コンピテンシー」は、学生諸君に対して卒業時に身に付けておいて欲しい能力を提示したのですが、同時に、そのような能力を育成することを、大学全体の教育目標として示したのもでもあります。

## 2. 「愛大学生コンピテンシー」の構成要素について

「愛大学生コンピテンシー」は、「5つの能力」によって構成されています。そのそれぞれが、2つ又は3つの具体的な力（合計「12の具体的な力」）として表現されています。

この「5つの能力」は、ベンジャミン・ブルーム（Benjamin Bloom, 1913-1999、アメリカの教育心理学者）の「教育目標の分類学」（taxonomy of educational objectives）をベースにしています。ブルームは、教育の目標を「認知的領域」（cognitive domain）、「情意的領域」（affective domain）及び「精神運動的領域」（psychomotor domain）の3つの次元に分類しています。それぞれの組織的原理は、「精神的操作の複雑化」、「価値・態度の内化」及び「神経系と筋肉系とのあいだの協応の達成」であり、それぞれの次元で教育目標が高次化していくと考えました<sup>2)</sup>。この3つの次元に分ける考え方は、教育学の分野で広く受け入れられ、それを変形した分類法が、日本の教育現場でも用いられています。「知識・理解」「思考・判断」（認知的領域）、「関心・意欲・態度」（情意的領域）、「技能・表現」（精神運動的領域）という分類は、本学の各学部のDPでも使われていますし、2008（平成20）年12月24日の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」（以下「学士課程答申」という。）の中の「学士力」<sup>3)</sup>の項目立てにも使われています。「愛大学生コンピテンシー」は、本学の各学部のDPや「共通教育の理念・教育方針」にある「学士基礎力」<sup>4)</sup>、そして「学士力」や経済産業省の提唱する「社会人基礎力」<sup>5)</sup>の項目も参考にしながら策定されています。

それでは、これから「愛大学生コンピテンシー」のそれ

2) [http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/pictures/subpages\\_j/0078\(taxonomy\).html](http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/pictures/subpages_j/0078(taxonomy).html) 参照。

3) 各専攻分野を通じて培う学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～（[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf) 参照）（本稿末の参考資料「表1」参照）

4) 愛媛大学「学士基礎力」（本稿末の参考資料「表2」参照）

5) 社会人基礎力〈3つの能力/12の能力要素〉（本稿末の参考資料「表3」参照）

ぞれの能力について見ていきましょう。

## I. 知識や技能を適切に運用する能力

### 1. 必要な情報を収集・整理できる

### 2. 個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる

### 3. 習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現（記述・口述）できる

この「知識や技能を適切に運用する能力」は、主に「知識・理解」の領域（認知的領域）に関係していますが、さらに「技能・表現」の領域（精神運動的領域）も含んでいます。この能力は、いわゆる学修一般の基礎をなす能力と言えるでしょう。

狭い意味での学問研究に留まらず、科学的手法を対象にアプローチする場合には、まず第一に、必要な情報を収集し、整理する力が必要です（I-1. 「必要な情報を収集・整理できる」）。必要な文献・資料を読んだり、実験や調査、観察を行うことによって、知識の材料を収集し、整理します。しかし、厳密に言うとは、このI-1の力は、何らかの知の枠組みを前提していますので、実は循環的な構造（正確には上昇的スパイラル構造）をしています。全体を理解していないと部分は理解できませんが、全体を理解するためには部分を理解する必要があります。「理解」という作業には、部分の理解と全体の理解との循環的な構造が存在します。例えば、「To be to be, ten made to be.」という文を見た時に、英語としては理解できません。実は、「飛べ飛べ、天まで飛べ。」という日本語の文をローマ字表記したものです。日本語をローマ字表記するルールという全体的な知の枠組みがあって、初めて部分である文字の組み合わせが理解できます。しかし同時に、部分（文字の組み合わせ）についての情報がないと、全体としての知の枠組みは、物事を理解するための枠組みとしては機能しません。全体的な知の枠組みのことを哲学的解釈学では「先行理解」（Vorverständnis）と言いますが、「必要な情報を収集・整理する」ためには、何が必要で、何が不要でないかを、ある知の枠組み（先行理解）に基づいて取捨選択し、その枠組みに従って整理する必要があります。つまり、何らかの知の枠組みが前提されます。しかし、その枠組みに従って「必要な情報を収集・整理する」ことで、それぞれの情報についての理解が深まり、この作業を通して知の枠組み全体についての理解もより明確に、より完全なものになっていきます。その意味で、このI-1の力は、知の枠組み（全体）についての理解と個別な情報（部分）についての理解が、互いに互いを前提し、理解がより深まっていくという循環的な構造を持っていると言えます<sup>6)</sup>。

次には（I-2. 「個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる」）、その収集整理した情報を知識として

体系化する、あるいは修得した技能を知識の体系と有機的に関連させ、必要に応じて自分で使いこなせるようにすることが必要です。例えば、科学的実験による測定・分析の技術の修得、調査や観察による情報の整理、あるいは、文献や資料を読みこなす力を身に付けること等々。しかしそれらも、単に断片的に行うだけでは本当の意味で知識・技能を獲得することにはなりません。学んだことを自分の中で相互に関連づけ、可能な限り体系化することによって初めて、それらを修得したと言えます。とりわけ、断片化された知識・情報が氾濫している情報化社会・ネット社会においては、知識を「相互に関連づける」ことは極めて重要です。学問研究とは元来、このような知の体系化の営みであり、知識・技能の修得とは本来このように行われるべきものです。このI-2の力は、学士課程答申の「学士力」の中の「1. 知識・理解」の部分が求めているものにほぼ該当すると考えることができます。

しかし、知識と技能が本当の意味で自分のものとなったと言えるのは、それを自分の中できちんと構造化・体系化し、適切に表現できるようになった時です。「分かっているけれども表現できない」のでは、本当の意味で分かったとは言えません。I-3. 「習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現（記述・口述）できる」は、一段高いレベルを要求しています。理解したことを、自分なりに論理的な筋道を立てて、体系化された知識として、しかも相手が理解しやすい適切な表現方法で表現する力を要求しています。ですから、このI-3の力は、「学士力」でいう「2. 汎用的技能」の中の(2)数量的スキル、(3)情報リテラシー及び(4)論理的思考力等の要素も含んでいます。

従って、この「I. 知識や技能を適切に運用する能力」だけでも、大学における学びにおいて必要とされ、また目標とされるべき能力要素が十分に含まれていると言えます。しかしそう言えるのは、このIの能力が、以下に示す能力と密接に結びついているからです。

本学で開講されているすべての授業は、学生諸君がこのような能力を身に付け、さらに伸ばすことを目標として設定される必要があります。しかし、単なる知識伝達型の講義形式だけでは、このような能力を十分に育成することはできません。必要な知識や技能の枠組みを体系的に学ぶとともに、その都度その枠組みを使って情報を収集・整理し、体系的に関連づけ、効果的に表現する訓練をする必要があ

6) いわゆる「解釈学的循環」（der hermeneutische Zirkel）の構造です。「解釈学的循環」については、マルティン・ハイデッガー『存在と時間』第1部第1編第5章第32節「理解と解釈」（原佑／渡邊二郎訳『存在と時間 II』中公クラシックスW 29、中央公論新社、2003年、47-60頁）や、ハンス＝ゲオルク・ガダマー『真理と方法』第2部第2章第1節a～b（巒田取／巻田悦郎訳『真理と方法 II』叢書ユニベルシタス176、法政大学出版局、2008年、421-449頁）等を参照。

ります。学生諸君は、このような能力を伸ばすことを意識して、主体的に学ぶ必要があります。このことは、この後の能力すべてにおいても当てはまります。

## II. 論理的に思考し判断する能力

4. 広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる  
(例：クリティカル・シンキング／創造的思考)
5. 科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる  
(例：意思決定・判断力／課題探求・発見・解決力)

この能力は、主に「思考・判断」(認知的領域)に関わるものですが、そこから発展して、「関心・意欲・態度」(情意的領域)にも関わっています。この能力も、学修の基礎的能力と言えます。学問研究だけでなく、社会生活においても、物事を論理的に思考し、判断できることは、高等教育を受けた者には必須の能力です。

「愛大学生コンピテンシー」では、この能力を、まずはII-4.「広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる」力として提示しています。既に示したように、様々な情報を収集・整理し(I-1)、それを相互に関連づけ(I-2)、広い視野に立って(つまり、可能な限りの情報を収集し、既に身に付けている知識・技能と関連づけながら)、論理的に考えて、対象を分析し、解釈します。従って、IIの能力は、Iの能力と一体化して働くものです。例示として挙げられている「クリティカル・シンキング(批判的思考)」は、既存の学問的知識の体系・枠組みも考慮しながら、なおかつ先入観を排除して、客観的根拠に基づいて対象を多面的に考察し、主体的に正しく(=論理的に)思考することです。この場合、他者の主張だけではなく、自分自身の主張をも批判的に考察します。この場合の「批判的」とは、単に既存の主張を論駁し、否定することを意味するものではありません。科学的・客観的根拠に基づいて、「知の境界線を定める」ことです。これは正しい、これは間違っている、この主張は根拠が不明確である、これはこのような手法・枠組みでは判断できない、等々を見定める作業が、クリティカル・シンキングです。ただ単に「誰それ先生が言っているから正しい。」と言うのは、盲信と同じで、高等教育を受けた真に教養のある人のとるべき態度ではありません。それが正しいと言える根拠を自分自身で提示できるようにならなければ、他人を納得させることはできません。そして、自分自身でその主張の根拠が提示できた時に、初めて「創造的思考」に到達したと言えます。この力は、主に「学士力」の「2. 汎用的技能」の中の「(4) 論理的思考力」に対応すると言えます。

そして、このような分析・解釈に基づいて(=科学的根拠に基づき)、対象を判断し、自分自身が直面している状況から課題を正しく見つけ出し、課題の解決策が必要な場

合には、その解決策を提示できる力が、II-5.「科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる」です。学問研究においてはもちろんのこと、社会生活においても、私たちは常に「意思決定」を求められ、「判断力」を発揮しなければなりません。実は、私たちは自覚しないでもいつも意思決定を繰り返しています。食事の時に何から食べ始めるか。大学からの帰り道は、いつものルートで真っ直ぐ帰るか、それともどこかに寄って帰るか。私たちの行為は、(自覚するにせよ、しないにせよ)自分自身の意思決定によって初めて生じます。日常生活の多くの場面では、それほど真剣に「この意思決定の根拠は？」などと問う必要はないかも知れませんが、自らの意思決定によって行為が生じるものであるが故に、私たちは自分の行為に責任を持つ必要があります。

私たちは自分自身だけでなく、周りの人たちにとっても重大な影響を及ぼす行為について、意思決定を迫られることがあります。その時に、その行為が正しいものであるかどうかは、その意思決定の根拠を正しく提示できるかどうかにかかっています。その根拠が科学的に(=客観的に)正当なものであると示すことができ初めて、他者からの承認が得られます。自立した個人として生きるためには、このような意思決定の根拠をきちんと認識し、それが客観的に正当なものであることを示すことが必要です。そのためには、自分の置かれている状況を正しく認識し、そこにある課題を見つけ出し、その課題を正しく解決する方策を考え出す力が必要です。

「課題探求・発見・解決力」は、主に「学士力」の「2. 汎用的技能」の中の「(5)問題解決力」に対応し、そして「4. 統合的な学習経験と創造的思考力」へと発展するものであると言えます。「社会人基礎力」では、「考え抜く力(シンキング)」の特に「課題発見力」と「計画力」に対応します。

Iの能力と同様、IIの能力を伸ばすためには、実際にやってみることが大切です。経験を積み重ねて、「思考・判断」の力を鍛えていかないと、この能力を伸ばすことはできません。実は、大学の各専門分野が最も得意とするのが、この能力の鍛錬です。正課の授業や卒業研究は、暗黙裏にこのような能力の鍛錬の場として機能してきました。これからは、むしろ大学教育全体がこのような能力を鍛錬し、伸ばすための場であるということを明確に意識して、明示的に目標として設定する必要があります。

しかし、IとIIの能力を鍛える場は、正課教育の範囲だけでは留まりません。本学が取り組んでいる準正課教育である、例えば愛媛大学リーダーズ・スクール(ELS)、環境ESD指導者養成講座、スチューデント・キャンパス・ボランティア(SCV)等の場においても、これらの能力養成は意識的に行われています。特にこの準正課教育においては、教員だけではなく職員も学生指導に積極的に関与し

ています。また、正課外活動であるサークル活動においても、自分たちが置かれている状況を正確に把握し、それに基づいて年間の、そして日々の活動方針を決定し、実行していくことは、サークルの目標達成のために不可欠のことです。

### Ⅲ. 多様な人とコミュニケーションする能力

#### 6. 様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる

(例：ダイアログ／ディスカッション／プレゼンテーション)

#### 7. 目的達成のために多様な人と協働できる

(例：協調性／チームワーク／リーダーシップ)

この能力は、主に「関心・意欲・態度」(情意的領域)と「技能・表現」(精神運動的領域)に関わっています。この能力は、大学を卒業した人が社会の中で活躍するためには必要不可欠な能力であるにもかかわらず、これまでの日本の大学教育ではこの能力の育成にあまり成果を上げてこなかったという批判があります。そのために、この能力は学士課程答申の「学士力」や経済産業省の「社会人基礎力」において特に強調されています。

Ⅲの「多様な人」で想定されているのは、様々な年齢・性別・職業・経歴・文化的背景等々の異なる人々ということです。文化的背景という場合には、日本国内での様々な地域や世代等々の違いということも含まれますが、当然、国や民族の違いということも含まれています。

人間は、「社会的動物」<sup>7)</sup>として、ある特定の時代のある特定の地域の人間社会に生まれて成長し、存在しています。そのため必ず、ある文化的背景を背負った個人として存在しています。自分が持っている文化的背景と似通った背景を持った人とコミュニケーションすることは、比較的簡単です。特に、現代の日本社会では、小学校・中学校・高校時代は、かなり似通った背景を持つ集団が形成されており、多くの人はその中でコミュニケーションしか経験しないで成長することが通例となっています。今日、学校において「いじめ」が深刻化しているのも、このような集団の均質性や、個人が所属する集団の単一性が無関係ではないでしょう。大学でも、事情は似たようなものです。集まっている人々の出身地域が少し広がっただけで、かなり均質な文化的背景を持った同世代集団が形成されています。大学において受けるいわゆる「カルチャーショック」は、通常それほど大きなものではありません。

7) 「社会的動物」(πολιτικόν ζῷον: politikon zōon)

言うまでもなく、「人間」を表現した、古代ギリシアを代表する哲学者アリストテレスの有名な言葉です。哲学の世界では「ボリスの動物」と訳すこともありますが、「社会的存在」としての人間存在を端的に表現した言葉です。アリストテレス『ニコマコス倫理学』第1巻第7章1097 b 11-12及び『政治学』第1巻第2章1253 a 2-3を参照。

しかし、激動期にある現代社会が直面している状況は、集団の均質性によってコミュニケーションが保証されるほど甘くありません。そのために、大学を卒業して社会人になったとたんに、コミュニケーションを十分に取れないために、本当の意味での「カルチャーショック」を受けるといった状況が頻発しています。就職後3年以内に離職する大学卒業生の比率の増加は、その典型的な現象と言えるでしょう。学生を受け入れる企業側も、この問題に悲鳴を上げて、何とか対策を講じたいと真剣に考えています。その一環が経済産業省の「社会人基礎力」という概念の提唱であると言ってもいいでしょう。

さらに、グローバル化が進展する現代社会においては、様々な国々の様々な文化的背景を持った人々が、チームを組んで課題に取り組むということが、日常化しています。その際に、均質な集団におけるコミュニケーション・スキルしか身に付けていない人は、チームに入り込むことができず、取り残されていきます。従って、現代社会において自立した個人として自己を実現するためには、グローバルな視点から見たコミュニケーション能力を身に付ける必要があります。

Ⅲ-6でいう「様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる」ということは、様々な文化的背景を持つ人々とのコミュニケーションを想定しています。しかし、ここでいう力は、「学士力」の「2.汎用的技能」の中の「コミュニケーション・スキル」がいう正確な日本語運用能力とか外国語運用能力、あるいはビジネス・マナーといった、狭義のコミュニケーション・スキルだけを表しているわけではありません。「適切な対話・討論ができる」ためには、そのような基礎的スキルが必要であることは言うまでもありませんが、ⅠやⅡで示された知の運用能力がないと、「適切な」対話や討論はできないということも含意しています。「社会人基礎力」の「チームで働く力(チームワーク)」の中の「発信力：自分の意見をわかりやすく伝える力」や「傾聴力：相手の意見を丁寧に聴く力」、「柔軟性：意見の違いや立場の違いを理解する力」、さらには「情況把握力：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」といった能力要素も、このⅢ-6の力に含まれていると考えられます。

Ⅲ-7。「目的達成のために多様な人と協働できる」では、Ⅲ-6で示したコミュニケーションの力を基に、多様な人々とチームを組んで課題解決にあたる力を示しています。「人間は社会的動物である」と言う場合には、人間は互いに協力し合って目的を達成する生き物である、人間の活動は元来そのように組織的(systematic)である、ということが含意されています。従って、個々人が自己を実現するためには、多くの人と互いに協力し合って、協調し、チームを組み、適宜リーダーシップを発揮し合いながら目的を達成していくことが必要です。「学士力」の「3. 態

度・志向性」の「(2)チームワーク、リーダーシップ」や、「社会人基礎力」の「前に踏み出す力(アクション)」の「働きかけ力：他人に働きかけ巻き込む力」及び「チームで働く力(チームワーク)」の各能力要素に該当する部分です。

このようなコミュニケーション能力を育成するためには、実際に多様なメンバーでチームを編成し、その中で様々なコミュニケーション活動を行い、チームワークを発揮して目的を達成する、という経験を数多く重ねることが必要です。しかし、既に述べたように、現在の日本の大学では、そのような機会が十分に保証されているとは言えません。従って、このようなコミュニケーション能力を育成するためには、学ぶ側も教える側も意識的に、それを経験する機会を設ける必要があります。手近な方法としては、均質と見える学生集団でも、一人ひとりとは違いますから、互いの発想の違いや、ある問題に対する考え方の違いを見つけ出して、まずお互いに討論してみることです。他者を理解し、自己を理解することが、コミュニケーションの基本です。さらには、短期間でもいいから海外留学を経験したり、日本人学生が海外からの留学生と交流する機会を増やして、お互いの違いと共通するところ、あるいは協力できるところを一緒に考えてみたりする経験はたいへん貴重です。また、インターンシップで、今までほとんど交渉のなかった社会人と一緒に仕事をさせてもらうとか、あるいは、地域のフィールドに出て行って、その地域の人たちと一緒に、地域の課題とその解決策を考え、実践してみる、といったことも有効です。これらのことは、正課教育の授業や研究活動でも取り組めるでしょうし、準正課教育の中で既に組み込まれているものもあります。

#### IV. 自立した個人として生きていく能力

##### 8. 自らの個性や適性を活かして行動できる

(例：自己理解／自己決断／リフレクション)

##### 9. 社会的関係の中で自分の行動を調整できる

(例：順応性／セルフマネジメント／規範遵守)

この能力は、主に「関心・意欲・態度」(情意的領域)及び「技能・表現」(精神運動的領域)に関わる能力です。

人間は、一人ひとりの存在が代替不可能な、唯一性・単独性を持つ存在者です。この性格を「各自性」(Jemeinigkeit)と表現したのは、20世紀を代表するドイツの哲学者マルティン・ハイデッガーです<sup>8)</sup>。また、多くの事物が交換可能な「価格」(Preis)を持つ「物件」(Sache)であるのに対して、自由の主体としての人間すなわち「人格」(Person)

は、他のものとは交換不可能な絶対的な価値すなわち「尊厳」(Würde)を持つと言ったのは、18世紀の哲学者イマヌエル・カントです<sup>9)</sup>。人間は、人間として存在している限り、一個人として生きているという事実から逃れることはできません。それは、単に物理的に他の人間とは異なる空間を占める単独の物体として存在しているということではありません。人間は、常に既に単独の自立した個人として生きるという状況に投げ込まれています。

しかしその一方で、人間は「社会的存在」<sup>10)</sup>として、常に他者ととも存在し、彼らを含めた環境(周りの世界)の中に存在しています。そのために、差し当たって大抵は、個々人は自分の在り方を周りの世界から理解してしまいます。そして、自覚することなく、周りの世界に合わせて自分自身の行動を決定してしまいます。いわゆる「周りに流されて」生きています。しかし、人間はその本性上、単独の自立した個人として存在するものであるために、ただひたすら周りに流され、周りに迎合して生きていくことなどできません。人間は、水の流れの中を転がされ続ける石ころとはわけが違います。

そうだとすれば、人間は「社会的存在」として周りの世界と常に関わりながら、単独の自立した個人として生きるしかありません。このような人間の本性を踏まえて、そこで特に必要と考えられる能力を示したのが、このIVの能力です。

IV-8.「自らの個性や適性を活かして行動できる」では、周りの世界との関係を踏まえながら、自分で何ができるかを考える時に必要とされる力を提示しています。社会的存在としての自己を実現するためには、自分自身を十分に理解し、自らが置かれている状況の中で自分の能力や適性、さらには自分の志や願望も踏まえて自ら決断し、その際に常にそのプロセスそのものを振り返り自己省察し、新たな状況に立ち向かう、という仕方です。「自らの個性や適性を生かして行動できる」力が必要です。「学士力」でいう「3. 態度・志向性」の「(5)生涯学習力」と相通する力です。「社会人基礎力」では、「前に踏み出す力」の「主体性：物事に進んで取り組む力」や「考え抜く力(シンキング)」の「実行力：目的を設定し確実に行動する力」と関係していると考えられます。

しかしその際に人間は、他の人々との関係(社会的関係)

9) イマヌエル・カント『人倫の形而上学の基礎づけ』第2章(野田又夫/他訳『プロレゴメナ 人倫の形而上学の基礎づけ』中公クラシックス W42, 中央公論新社, 2005年, 297頁)参照。

10) 人間を「社会的存在」として捉える視点は、和辻哲郎の『人間の学としての倫理学』(1934年)における、「人間」という語の考察を参考にしています。和辻は、「人間」という日本語を分析して、「人間の個人性」と「人間の世間性」とを明らかにし、「人間存在とはその両性格の統一である。」と述べています。和辻哲郎『人間の学としての倫理学』第二章二〜三(岩波文庫版18-38頁)参照。

8) マルティン・ハイデッガー『存在と時間』第1部第1編第1章第9節(原佑/渡邊二郎訳『存在と時間 I』中公クラシックス W28, 中央公論新社, 2003年, 197頁), 第4章第25節(297頁), 及び第6章第40節(『存在と時間 II』145頁)等を参照。

の中で、その関係性そのものに働きかけながら行動し、自己を実現するしかありません。社会は、個々人にとって、柵（しがらみ）でもありますが、実は行為を可能にする足場でもあります。その抵抗を嫌って社会性を無視することは、あたかも鳥が、空気の抵抗を嫌って、真空中での自由な飛翔を夢見ることに似て、無意味なことです。人間がその行為を実現できるのは、社会の中だけです。その際に必要とされる基本的な力を提示したのが、Ⅳ-9です。「社会的関係の中で自分の行動を調整できる」力がなければ、本当の意味での自己実現はできません。「順応性」「セルフマネジメント」「規範遵守」といった例示は、そのための具体的な要素を示したものです。「学士力」でいう「3. 態度・志向性」の「(1)自己管理能力」や「(3)倫理観」、「社会人基礎力」でいう「チームで働く力（チームワーク）」の中の「状況把握力：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」や「規律性：社会のルールや人との約束を守る力」「ストレスコントロール力：ストレスの発生源に対応する力」が該当します。

この能力に関しては、大学生活全体の中で培われるものと言うことができますが、本学では、共通教育、特に初年次科目の「こころと健康」や「スポーツ」などでその基礎知識を提供しています。それを基として、専門教育における研究室での活動や、準正課教育、さらには正課外のサークル活動等で意識的に伸ばしていくことが期待されます。

#### V. 組織や社会の一員として生きていく能力

10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる  
(例：「お接待」の心／ホスピタリティ)
11. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる  
(例：責任感／連帯感／帰属意識／愛校心)
12. 地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる  
(例：社会貢献／グローバルマインド)

この能力は、主に「関心・意欲・態度」(情意的領域)に関わります。従来、特に日本の20世紀後半の大学教育(正課教育)では、あまり強調されてこなかった能力です。

エリート教育として始まった日本の大学教育では、このような能力は、改めて教えなくても、大学を卒業し社会に出た卒業生は、程度の差はあるにせよ自ずと身につけているものであるという共通認識の下に教育が行われてきました。しかし、とりわけユニバーサル段階<sup>11)</sup>を迎えた大学教育においては、目標を明示して、それを達成するためにどうするかという明確な意識を持たないと、教育はうまく機能なくなっています。暗黙裏の了解をあえて明示し、その達成のために組織的に取り組むことによって、よりいっそうの成果を挙げることができます。本学は、まだほとん

どの大学が教育目標として明示していないと思われるこのVの能力を、あえて明示することにしました。

Ⅳで挙げた「自立した個人として生きていく能力」とこのVの「組織や社会の一員として生きていく能力」とは、密接に関連しています。既に述べたように、「社会的存在」としての人間が、自立した個人として生きていくためには、社会との関わりを切り離すことはできません。むしろ個々人の独立と人格の尊厳は、人間社会という関係性の中でのみ可能です。自立した個人とは、ぼつんと宇宙空間に孤立している人ではなく、組織や社会の一員として生きていく人間に他ならないのです。

しかし、既にⅣの能力に関して指摘したように、「組織や社会の一員として生きていく」といっても、それは決して全体主義的な態度を要求することではありません。周りの世界に唯々諾々と盲従するような在り方は、絶対的な「各自性」と「尊厳」を持つ人間存在にとっては不可能です。人間は、その本質において自律的であり、自由な存在者です。その自由を発揮する足場として組織・社会を必要とします。逆説的ではありますが、組織や社会の一員として存在しなければ、人間は自由で自立した個人ではありえないということです。

「組織や社会の一員として生きていく」ためには、まずはそのメンバーとして共に生きる人々を理解し、互いに助け合うことが必要です(V-10。「他者を理解し、他者のために役立つことができる」)。特に、本学がある愛媛県は、四国八十八箇所巡礼の中の「菩提の道場」として、お遍路さんたちに「お接待」を行う伝統を持つ地です。それぞれの人生を背負い、煩惱とその罪からの解脱を願って八十八箇所を巡礼するお遍路さんたちに、共に生の苦を背負った者として、宿や飲食を提供する「お接待」の伝統は、四国の歴史や文化に深く根差したものです。「組織や社会の一員として生きていく」ということは、共に生きる人々と共に喜び、共に悲しみ、苦しむことであり、またその人たちのために自分ができることをさせていただくことです。「『お接待』の心」とは、そのような心です。「ホスピタリティ」という言葉も、同様な意味で理解できます。

言うまでもなく、組織や社会はその構成メンバーが役割分担(分業)をしながらそれぞれの役割を果たすことによ

11) アメリカの社会学者マーチン・トロウ (Martin Trow) は、高等教育への進学率が15%を超えると高等教育はエリート段階からマス段階へ移行するとし、さらに、進学率が50%を超える高等教育をユニバーサル段階と呼んでいる。「ユニバーサル」というのは、一般に「普遍的な」と訳されるが、トロウによると、「ユニバーサル・アクセス」というのは、誰もが進学する「機会」を保障されているという学習機会に着目した概念である。(中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」(審議まとめ)平成24年3月26日、「用語集」25頁、[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/03/30/1319185\\_2\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/03/30/1319185_2_1.pdf)による。)

て、初めて機能します。メンバーの一人ひとりがその役割を果たすことによって、初めて組織は組織として存在するとも言えます。確かに、社会的存在としての人間は、社会（組織）なしには存在できませんが、社会（組織）も、それを構成する個人なしには存在できないのです。V-11、「集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる」は、このような社会的存在としての人間が、人間として存在するために不可欠である社会性を発揮するために必要な力を示したものです。それは、これまで述べてきたⅠからⅣまでの能力を踏まえた上で、自分自身が所属している社会・組織をより良いものにしていくという気概を持つこと、それがここで求められています。「責任感」「連帯感」「帰属意識」「愛校心」といったキーワードは、このような意味で理解する必要があります。「帰属意識」とか「愛校心」などというと、誤ったエリート意識や差別意識を助長するのではないかという危惧があるかもしれません。しかし、本学が目指しているのは、そのようなことではなく、上に述べたような、自らが所属する組織や社会をより良いものにするという志と矜持と能力を持った人間を輩出することである、ということは強調しておきます。

最後のV-12、「地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる」は、社会的存在としての人間が、現代社会において果たすべき役割を改めて提示したものです。社会は、現実には常に地域社会として一人ひとりを取り巻いています。とりわけ、地方国立大学として、愛媛という地域に立地する愛媛大学は、「地域にあって輝く大学」でありたいと考えています。「地域の諸課題に向けて人々とともに考え、行動し、地域社会の自律的發展に貢献する」（愛媛大学憲章第9条）は愛媛大学の基本目標の一つですが、それを実践するのは構成員一人ひとりです。学生諸君や卒業生には、自分が所属している社会や組織をより良いものにするという志を持って「社会貢献」できる人間であってほしいと考えています。

グローバル化した現代社会では、地域のどんな課題も世界の動きと密接な関係を持っています。その意味では、常に地球規模で考えながら、自分の地域で活動すること（Think globally, act locally.）が求められます。この「グローバルマインド」（glocal mind）なしには、社会の中で正しい役割を果たすことはできません。

このVの能力は、他のⅠからⅣの能力と共に、本学の教育活動全体を通して育成されるべきものです。主に情意的領域に関わるこの能力を鍛えるためには、認知的領域や精神運動的領域に属する能力も鍛え伸ばしながら、実際の組織・集団の中での経験を多く積むことが必要です。そのためには、正課教育も大きく関わるでしょうが、準正課教育や正課外活動の関与の度合いが大きいと考えられます。この能力に関しては特に、教える側も学ぶ側も、この能力を意識的に鍛え伸ばすという認識を持つことが大切です。

### 3. おわりに

以上、「愛大学生コンピテンシー」の5つの能力と12の具体的な力（能力要素）について、個別に見てきました。しかし、既に述べたように、これらの能力や力（個々の能力要素）は、単純に個別的に育成・強化されたり、発揮されたりするものではありません。むしろ個人の行動特性として、トータルに発揮されるべきものです。とは言っても、人によってそれぞれの能力要素の重要度や到達度に違いがあるはずですが、このように「5つの能力」「12の具体的な力」として分類したのは、学生諸君に自己分析・自己省察のツールとして利用してもらうためです。この「愛大学生コンピテンシー」の枠組みを参考にして、自分自身の能力の現状を正確に把握し、強いところはより鍛えて伸ばしていき、弱いところは補い強化するという意識的に取り組んでもらいたいと思います。

### 謝 辞

本稿は、愛媛大学長・柳澤康信先生の徳憑によって成ったものです。ご多忙にも拘らず拙稿に目を通して下さり、ご斧正を賜ったことに、改めて感謝申し上げます。

また、「愛大学生コンピテンシー」の原案作成に尽力し、本稿にも目を通してアドバイスをしてくれた、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の小林直人室長及び山田剛史准教授を始めとする教員の皆様にも、感謝いたします。

〈参考資料〉

「表1」各専攻分野を通じて培う学士力 ～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～

<p><b>1. 知識・理解</b></p> <p>専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。</p> <p>(1) 多文化・異文化に関する知識の理解</p> <p>(2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解</p>
<p><b>2. 汎用的技能</b></p> <p>知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能</p> <p>(1) コミュニケーション・スキル</p> <p>日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。</p> <p>(2) 数量的スキル</p> <p>自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる。</p> <p>(3) 情報リテラシー</p> <p>情報通信技術（ICT）を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。</p> <p>(4) 論理的思考力</p> <p>情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる。</p> <p>(5) 問題解決力</p> <p>問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる。</p>
<p><b>3. 態度・志向性</b></p> <p>(1) 自己管理力</p> <p>自らを律して行動できる。</p> <p>(2) チームワーク、リーダーシップ</p> <p>他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる。</p> <p>(3) 倫理観</p> <p>自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。</p> <p>(4) 市民としての社会的責任</p> <p>社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる。</p> <p>(5) 生涯学習力</p> <p>卒業後も自律・自立して学習できる。</p>
<p><b>4. 統合的な学習経験と創造的思考力</b></p> <p>これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力</p>

([http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf) 参照)

「表2」愛媛大学「学士基礎力」

1. 自らの個性や適性に基づき学び続ける姿勢（基本姿勢） 自分に向き合う／前に踏み出す／自ら必要な知識や技術を学ぶ／自己管理／健康管理
2. 多様な人と協働するための表現力やコミュニケーション力（基本的コミュニケーション力） 聴く力／表現する力／チームで働く力／リーダーシップ
3. 学習活動や社会生活に必要な技能（基本技能） 外国語の基礎的運用能力／数量的スキル／情報リテラシー
4. 多角的な視点を培うのに必要な幅広い基礎知識（基礎知識） 諸科学の基礎的知識／異文化理解／人文・社会・自然分野についての包括的理解
5. 問題の発見・解決に取り組むための思考力（基本的思考力） 課題を発見する力／論理的思考力／科学的思考力／知識・情報の運用力／計画力

「表3」社会人基礎力〈3つの能力／12の能力要素〉

<b>前に踏み出す力（アクション）</b> ～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～ 主体性：物事に進んで取り組む力 働きかけ力：他人に働きかけ巻き込む力 実行力：目的を設定し確実に行動する力
<b>考え抜く力（シンキング）</b> ～疑問を持ち、考え抜く力～ 課題発見力：現状を分析し目的や課題を明らかにする力 計画力：課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 創造力：新しい価値を生み出す力
<b>チームで働く力（チームワーク）</b> ～多様な人々とともに、目標に向けて協力する力～ 発信力：自分の意見をわかりやすく伝える力 傾聴力：相手の意見を丁寧に聴く力 柔軟性：意見の違いや立場の違いを理解する力 状況把握力：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 規律性：社会のルールや人との約束を守る力 ストレスコントロール力：ストレスの発生源に対応する力

(<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/about.htm> 参照)